

## 11月講座のまとめ

### 〇11月講師より

今回、このような貴重な機会を頂けてありがとうございます。社会科を専門とされる先生たちと話すにあたりどのような内容が良いのだろうか、と職場にいる社会科が専門の先生に相談もしました。おかげさまでこちらもとても良い勉強の機会になりました。今回の話では、大きく分けて「バイアス」「障害とは」「障害と取り巻く歴史」「発達障害とは」「支援方法」の大枠で話をしました。また、話の中核として「権利保障」ということを何度も織り交ぜました。実は、話の中では触れなかったのですが、「社会モデル」の先には「人権モデル」という考え方があります。これについては、恥ずかしながら今年の国連勧告の内容で初めて知った言葉でした。今回の話し合いや、ワークの中ではとても先が明るいなどと思えるような感想や意見を入力いただきました。私自身もそうですが、まずは目の前の子どもの学ぶ権利を大切にしていこうと、改めて思いました。社会科に限らず、教育という営みにとって、「学ぶ」って面白いなと思ってもらえるように、今後も一緒に色々なことを考えていけると嬉しいです。

村浦新之助

### 〇参加者からの感想

#### \*「とても勉強になり、勇気もらった村浦レポート」

今日は用事があって途中で抜けてしまい、皆さんの質問や感想等を聞けませんでした。村浦レポート、とても勉強になりました。特に印象に残ったのは以下の4点です。

1、「ようこそバリア CAFE へ」や、学習障害のある松谷知直さんの動画、「We're The Superhumans - Rio Paralympics 2016 Trailer」の動画などは、いずれも5、6分と短くて見てもらいやすいもので、ぜひ私が主催する「中高生学生平和交流会」等で、若い人たちに共有したい内容でした。

2、またスライド4の「学校なんだから、〇〇なんだからこうしなくちゃ」というアンコン シャスバイアス、「ねばならぬ」という思い込み、については、歴教協 障がい児教育分科会で報告された、岡山県の市場美雄実践を思い出しました。重い情緒障害のある高3の男子生徒 Aさんが、毎日授業を抜け出して放送室のビデオカメラなどをいじりに行ってしまう。市場さんは「担任がもっとしっかり指導しろよ」という周りの教員の圧力を感じて、厳しく叱責するが、そのことで Aさんが市場さんを叩くという事態になってしまった。その時に市場さんは「自分がすべきことは、もっと厳しく指導すべきというバイアスに従うのではなく、Aさんの学習する権利を保証することだ」と考え、とことん Aさんのやりたいことに付き合った。その結果 Aさんは、市場さんを信頼するようになり、結果的に授業に参加できるようになったというものでした。私自身も「男なんだからもっと生徒をびしっとさせてよ」という女性教員のジェンダーバイアスに悩まされた経験があります。

3、スライド8の「障がいの有無は診断で決まるものではない」という言葉。

私は基本的には「健常者」と「障がい者」は「程度の差」だと思っています。私も突然の変更等にはパニックになります。色々とこだわりもあります。なので、どこかでパツと線を引いて「ここからは障がい者」と言えるものではないと思っています。ただ、それが強いほど「生きづらさ」が増してしまう、その生きづらさを軽減してあげることが教師などの役割だと思います。

4、いずれにしても、村浦さんのレポートは、さすがは博士課程で勉強されているだけあって、とても理論的だけれど、難しくなく解説してくれて、資料もとても分かりやすかったです。本当に、色々勉強になりました。ありがとうございました。

このレポートは、ぜひ多くの先生方に知って頂きたいので、来年の歴教協東京大会の「障がい児教育分科会」でも報告していただけたら、と思います。ぜひ、ご検討ください。

**\*村浦さんの膨大な内容に圧倒されました。**

中でも、「インクルーシブ教育は、統合教育ではない」というお言葉に納得しました。特別支援学級や特別支援学校のために、障がいをもつ子たちと普通級の子たちが分離させられてしまうことを懸念する方は多いです。ですが、特別支援教育の内容の深さを知るにつけ、ただ一緒にさせるのは違うのではないかと思ってきました。今の日本の貧しい教育の状況では、普通級にいる障がいを持った子たちは可能性を摘まれてしまうし、教員の負担が、あまりにも重くなってしまいます。支援員も付けて、予算も“莫大”に必要、ということに共感しました。

私は、ほとんどの勤務校に特別支援学級があり、生徒会の顧問をしていたので、さまざまな行事や生徒会活動で交流して来ました。フリスビードッジボールでは、特支の生徒の上手さに感心したり、生徒総会では、質疑の時間に特支の学級委員から「僕たちの学級には、歩くのがやっただという生徒もいます。ですから、廊下を走っている人とぶつくと大きな怪我をしてしまう危険があります。廊下を走らないで下さい、というのは、そういう意味があることを知って下さい」と要求を出してもらったりしました。村浦さんは、たくさんの引き出しをお持ちだと思います。最後の質疑の時に、丁寧に答え下さっていること、とても良かったと思いました。これからも、いろいろと教えて頂きたいと思いました。

**\*わたしが今回の授業づくり講座に参加したきっかけは高原先生が授業内で学習会に大学生のうちから参加したかったとポツリとつぶやいていたからです。その先生の言葉で歴教協を調べてみようと思いましたが、学習会ということで現役の先生方が多そうでわたしなんか参加していいのかと思うこともありましたが、今の自分だからこそ参加してみても感じたり学べることがあるのではないかと思います、今回歴教協の11月授業づくり講座にお邪魔させていただきました。**

まず、参加してみて、まだまだ自分は知らないことだらけだなということを強く実感しました。障がいについても、歴史や法律についても、発達障がいについても初めて知ることが多くありました。また、お話の中で紹介して下さった動画もテーマは違えども、どれもとても考えさせられるような内容のものでした。その中でも特に印象に残っているのは二足歩行者がマイノリティの世界だったらどうなるのかという動画です。その世界では喫茶店などのお店にいても椅子はないというのが衝撃でした。しかし、それと同時に自分自身が知らないうちに「普通」という線引きをしてしまっていないか、自分にとっての当たり前が周りにとってのもそうであると思いついてしまっていないか、様々な疑問が脳内をめぐりました。たしかに、現実の世界では喫茶店などの席にはすべて椅子が置いてあって、その椅子に座るのが当たり前というようになっていると思います。車椅子の方が来たらその椅子をどかすというような対応になっていると思います。でもそれって本当にみんなにとって過ごしやすい環境になっているのか、参加したことで今までとは違った視点から物事をみることができ、少し、自分の視野が広がったかなと思います。

そして、わたしが今から始めることができるのは知ることだと思えます。知らないということは、自分のものさしだけで物事をみてしまうことになるし、教員という立場であったら、生徒に押しつけてしまうということになるのではないかと思います。だからこそ、今回のような学習会に積極的に参加して、自分の考え方の幅を広げていきたいと思えます。わたしはこれまで、履修する授業を選ぶときに社会科に関連するという観点から選びがちでした。しかし、今回の授業づくりに参加してみて、自分の専修以外に関係するものの方が新たな学びや視点を得られると感じました。これからの履修ではこのことも意識していきたいです。それに加えて、今回ご縁があって歴教協の読者モニターをつとめさせていただくことになりました。まだまだ足りないところばかりですが、今の自分に出来ることに挑戦できて嬉しいです。

\*ありがとうございました。我々世代は大学で特別支援の授業を受けて介護等体験実習にも行ってはいるのですが、あまり特別支援について自発的に勉強したことがありませんでした。ですが、教育実習や今回のお話を受けて特別支援教育について学ぶ重要性を感じました。特に歴史的経緯のところに興味が湧いたので、まずはそこから勉強してみたいと思えます。

\*今回の村浦さんの話から、主に3つのことを学んだ。

第1に、教員がどのような立ち位置で子どもたちに支援をしていくかを考えることの重要性である。色眼鏡で見ないようにと考えるのではなく、考え方のクセを知り、それを解決するために当事者である子どもと相談しながら考えていくことの大切さを学んだ。経験を重ねるほど考え方が固執し、当事者である保護者や子どもに提案という名の押しつけのような形にならないように注意する必要があると考えた。

第2に、問題行動を減らすのではなく、適応を増やすことで問題行動が減っていくという発想の転換である。特に、「問題行動の背景にはその行動を学習する過程がある」という部分は思わずはっとさせられた。安易に問題行動はいけないと指導するのではなく、その背景に目を向けて適応策を考えていくことは、支援が必要な子どもだけでなく、どの子どもにも通じるものであると考えた。

第3に、行動として見えた段階ですかさず褒めていくことの大切さである。村浦さんの質問に対する回答から、ここ最近小さなことで褒めていくことが少なかったから学級が落ち着かなくなったのではないかと分析した。次の週から小さなことからすかさず褒めるように改めて意識したところ、学級の雰囲気も少しずつよくなっていった。このような小さな積み重ねの大切さが、子どもの成長や意欲につながることを再確認した。

最後に、特別支援学校に勤務されている先生の話聞く機会はほとんどないので、とても貴重であった。内容も非常に分かりやすかった。質問に対して的確に回答してくださり、ありがとうございました。

\*11月講座のご講演ありがとうございました。大学で教育心理学などの講義は、採用試験も視野に入れられた概説的な内容が多かったことを記憶していますが、今回の講座は実際に教室でどうアプローチしていくかなどのより実践的な内容の講義で、また違った観点からとても勉強になりました。私は大学院で勉強しながら短時間ながら時間講師として働いていますが、今回のように歴教協の授業づくり講座はより現場向きな内容に重点を置きつつ、基礎的な内容を網羅されているので、普段の自分の指導を振り返り、また改善することが出来ます。今回も自分の指導や動機づけについて振り返るきっかけとなりました。

推薦いただいた書籍もよく読んで、自分の指導に繋げていきたいと思います。質問にもたくさん時間をとって答えていただきありがとうございました。

\*個々への合理的な配慮は特別扱いではない、むしろ当たり前のことと思うのですが、既存のルール(これもマジョリティによるマジョリティのためのものといえるが…)と照らし合わせながら、如何に公平性(不公平から不公平へにならぬよう…)を保っていくのか、悩ましいと感じた次第です。そうした意味では、マジョリティを形成していく、一人ひとりの個々がマイノリティーとしての自覚を持ち、対等に発信(様々なツールで…)し、対話(ここも様々なツール・手段で…)から協働への道を模索していくことが重要なことではないか…一教員として、教育の場から実践・達成していきたいところです…消化しきれていないところもありますが、感想として述べさせていただきます。

#### 〇11月講座担当実行委員より

この社会科授業づくり講座に同期の村浦さんをお呼びすることができとても嬉しく思います。初任者の頃から彼の特別支援教育に対する幅広い知識と子どもたちへの熱い思いは誰にも負けていませんでした。10年前の初任の頃からいずれはこの講座へ講師としてきていただくことを意識していたのですが、当時の授業づくり講座では社会科の実践を取り上げる機会が多く、特別支援教育の内容を講座でやろうといった声はあまりありませんでした。それが10年経った今では、毎年1回は必ず特別支援教育についての内容に触れる講座が行われるようになり、それだけ特別支援教育の認知、理解が進んできていることを強く感じます。今回の講座では、特別支援教育についての知識はもちろんのこと、私たち一人ひとりの「当たり前」だと思っていた価値観が強く揺さぶられる。自分が物事を捉えている視野の方向性が正しいのかを改めて考えさせられるきっかけになったのではないのでしょうか。今回の村浦さんの講座を聞いて揺さぶられた気持ち、自分の物の見方に自信がなくなった部分は、ご自身で是非学び直し、新しい価値観、物事の捉え方を構築していただければと思います。教員の成長はこれを繰り返す中ことで得られるのではないかと私は考えます。今後もこの講座に引き続きご参加いただき、ご自身の成長の糧としていただきたいと思います。今回は講座への参加ありがとうございました。

津田隆広(埼玉県特別支援学校教諭)